

仏教通信「死にとうない」9月

高原学校の帰りのバスの中で、小学4年生の児童たちと映画『トイ・ストーリー3』を鑑賞しました。ラストに近い場面で、主人公のウッディ（カウボーイ人形）やバズ・ライトイヤー（アクションフィギュア）たちがゴミ処理場の焼却炉に落ちていく時、おもちゃたちは最後まで生きる希望を捨てずに抵抗していました。しかし、目の前の圧倒的な死（焼却炉の炎）を前に抗うのをやめ、迫り来る火炎を瞳に映し、恐怖に怯えながらも、持ち主のアンディのもとで暮らしてきた仲間たちとぎゅっと手をつなぎ合い、最期の時を迎えようとしました。夢や希望、そして難局を乗り越える勇気を子どもたちに与えてきたディズニー（ピクサー）アニメとしては意外であり、深く考えさせられる描写に感じました。

人は生まれたからには、誰もがいつか必ず死を迎えます。この不可避な道理に人はどう向き合うべきなのでしょう？歴史上の偉人たちが死に向き合う姿もまた、後世に語り継がれています。まず、仏教の開祖ゴータマ・ブッダは、臨終を迎えた時、悲しむ弟子たちへ「諸々の事柄は過ぎ去っていく。怠ることなく励みなさい」と説き、諸行無常の真理を示して静かに涅槃に入りました。また古代ギリシャの哲学者ソクラテスも、理不尽な死刑宣告に対し命乞いをせず、「人は誰も一度は死ぬのだ。その時が来たとして、うろたえるのではない」と弟子たちを諭し、穏やかでありながらも決して揺らぐことのない態度で毒杯を飲み干しました。

しかし、誰もが先賢のように死に向き合って受け入れられるわけではありません。破天荒な名僧として知られる一休宗純（一休禅師）は、臨終の際、立派な遺言（辞世の句）を期待する弟子たちを前に、「死にとうない（死にたくない）」と言い遺したと伝えられています。「大悟徹底（無常の理を理解し、迷いが一切なくなった境地のこと）」を成したはずの名僧が放ったこの一言には、「死を受け入れる悟りの境地になんぞ自分は至っていないのだよ」と、肩の力を抜かせるユーモアセンスと気取ることのない本音が込められていると私は受け止めました。「生きたい」と願う心は、生きものとして備わっている当然の本能であり、それこそが飾り気のない人間らしさなのかもしれません。

『トイ・ストーリー3』のウッディたちも、決して「死（おもちゃにとって『廃棄』されること）」が怖くなかったわけではありません。死を恐怖しながらも、どうにもならない「死の定め」を前に、ただあらがい続けるのではなく、愛する友（家族）の手を握ることを最後にしたのです。「死にたくない」という人間らしい本音や弱さを素直に抱えつつも、訪れる「生死の道理」を受け入れること。そして、最後の時が来るその瞬間まで、与えられた「いま」を誠実に生き、出遭うすべてのものと慈しみ合うこと。それこそが、生と死のはざまをフラフラしながら歩んでいる、この「わたし」が生きていくためのヒントなのかもしれません。

合掌

